和泉式部日記と為尊親王

森田兼吉

一

最近藤岡忠美氏[1]が和泉式部と弾正宮為尊親王との恋愛関係について提起された疑問――二人の恋愛が従来いわれてきたような熱烈純情なものであったかどうか、さらにいえばこの二人の間にはほんとうに恋愛関係があったのかどうかという問題は、和泉式部伝のみならず、和泉式部日記という作品の把握や評値に大きく影響する重大な問題であり、様々な角度から検討され、なるべく早く結論の出されることが望まれる。この問題の追求のし方には、少くとも、

一、為尊親王の生涯の把握。

二、和泉式部集や勅撰集に、和泉式部と為尊親王とにかかわる和歌があるかどうかを探査すること。

三、和泉式部日記の読みと、日記文学の中での和泉式部日記の位置づけ。

の三つの方向からの取り組みが考えられよう。藤岡氏の疑問は、おそらくは三の和泉式部日記の読みと把握を根底にして発想されたものと思われるが、現状では二と一を中心にすえて論は展開されており、わけても、勅撰集や和泉式部集には為尊親王にかかわる和歌が一首も存在していないという点が強調されたものとなっている。勅撰集のいくつかに和泉式部が為尊親王の薨去の悲しみを歌ったとする挽歌が見えるが、それらが敦道親王への挽歌の誤伝であることは動かせない事実であり[2]、したがって、為尊親王の名の見えない和泉式部集の中から、親王にかかわる歌の有無を検討することが、二の中心課題となっているのだが、この角度からの論議は所詮不毛なものにならざるをえない。たとえば、寺田透氏[3]によって為尊親王への挽歌として推定された、

世のいとさわがしきころ

はかなさにつけてぞなげく夢の世をみはてずなりし人によそへて　（六四七）

物をのみおもひし程にはかなくてあさぢがすゑの世となりにけり　（六四八）

や（引用は岩波文庫本『和泉式部歌集』による。かっこ内はその歌番号である）、木村正中氏[4]が「式部が為尊親王の薨去に遭逢して、深い打撃を受けたころ」の詠と考えられた、

なげく事ありときて、人の「いかなる事ぞ」ととひたるに

ともかくもいはばなべてになりぬべしねに泣きてこそみせまほしけれ　（一六三）

など、藤岡氏[5]の指摘されたように、かならずしも為尊親王へのものと決めてかかることはできないだろう。しかし、と同時に、これらが為尊親王の薨去とかかわりのないものだと言い切ることもできないのである。六四七の詞書の「世のいとさわがしきころ」が疫病流行のことを意味するものであることは確かである。藤岡氏の説かれるように、式部の生涯に疫疾の流行した年はけっして少くなく、ある年と限定して考えることはできないけれども、六四七の「夢の世をみはてずなりし人」という痛切なことばによって表わされた「人」は和泉式部のごく身近にいた大切な人でなければならないし、その人の死によって「物をのみおもひし程にはかなくてあさぢがすゑの世となりにけり」からは、人の訪れが絶え、荒れて浅茅が宿と化した式部の家が髣髴として来て、疫病流行の頃に薨じた為尊親王を考えるのがごく自然だと私には思われるのだが、このような論議が水掛け論に終わることはまず間違いがない。この方面以外からの追求が有効性を持つことになるであろう。私はさきに為尊親王の生涯の素描を試みたが[6]、資料面からいえば、為尊親王と和泉式部との恋愛を否定するよりも、認める方に分があるようであった。それを承けてここでは、和泉式部日記を丹念に読み込み、そこに為尊親王がどのように描かれているかを見、この作品の中で為尊親王の存在がどのような役割をになっているかを考えたうえで、虚構の存在する可能性が存するかいなかを検討していきたい。

以下、日記本文の引用は、寛元本系の飛鳥井雅章筆本を底本とし、三条西家本、応永本（京大本により他本を参照する）[7]によって訂正したものを用いる。

二

和泉式部日記の女主人公は次のような形でわれわれの前に登場して来る。

ゆめよりもはかなきよの中をなげきわびつゝあかしくらすほどに、はかなくて四月十よ日にもなりぬ[1]ればこのしたくらがりもてゆく。はしのかたをながむれば、ついひぢ[2]のうへの草のあをやかなるも人[3]はことにめとゞめぬをあはれにながむるほどに……[4]

1 も、底本ナシ。拠両本。2 ひ、底本ナシ。拠両本、3 人はことに、底本ことに人は。拠両本。4 ゝ、底本ナシ。拠両本。

ここに登場して来る女性は、「ゆめよりもはかなきよの中」をなげきわびながら空しく日々を明かし暮らしているのであった。「ゆめよりもはかなきよの中」ではじまる、印象的で希有の美しさをもつこの日記の起筆表現については、尾崎知光氏[8]によって、

夢よりもはかなき物は夏の夜の暁がたの別なりけり　（後撰　夏　一七〇　壬生忠岑）

夢よりもはかなきものはかげろふのほのかに見えしかげにぞありける　（拾遺　恋二　七三三　よみ人しらず）

の二首が引歌として想定され、和歌的な手法や、文学作品の起筆の展開史の中での位置づけ、式部の実人生とのかかわりなどについて様々な考察が行われている。その詳細について今はふれるいとまはなく、最近の木村正中氏[9]の委曲をつくした御論を参照されたいが、この部分で意外なほど軽く扱われ、突きつめて考えられていないのは「はかなきよの中」ということばの意味内容である。「よの中」については、普通、

。「世の中」は、男女の仲らい、男女の縁（えにし）である。（鈴木一雄氏　全講和泉式部日記）

。「世の中」は人生を表わし、人生を濃縮した男女の仲、つまり前年の六月十三日に没した為尊親王との恋をさす。（藤岡忠美氏　日本古典全集　和泉式部日記）

。「世は男女の関係をいひ、こゝでは、和泉式部日記が夫橘道貞と離婚する一つの原因となった恋人弾正宮為尊親王とのはかなかった縁をさす。（山岸徳平氏　日本古典全書　和泉式部日記）

。「世の中」　今日の世間という意味ではなく、男女の仲をいう習わしであった。即ち弾正宮と式部との関係をさす。（狩野尾義衛氏　対校和泉式部日記新釈）

のように注釈されている。戦前の注釈では、「人生」（竹野長次氏　校定和泉式部日記新釈。田中栄三郎氏　和泉式部日記詳解）という注もあったが、近頃の注釈書は、ニュアンスの差こそあれ、ほぼ右にあげたような解釈をしている。

「世の中」ないしは「世」に男女の仲らいの意味の存することに疑問はない。しかし、「世の中」という語と「はかなし」という語とが結びついて使われた場合、それはこの時代にあってはかなり限定された意味を表わすものになっていることに注目したい。古今集（三三）・後撰集（二八）・拾遺集（二九）の勅撰集、宇津保（一六五）・落窪（一三）源氏（二四九）の物語、伊勢（八）・大和（一三）・平中（五）の歌物語、それに蜻蛉日記（二七）・枕草子（九）の諸作品には、都合五七九例ほど「世の中」の語が見られるが、「はかなし」と結びついて用いられているのは二一例であり、それらはすべて、この世の無常を表現し、詠歎するものであった。

1　世の中のはかなきことを思ひけるをりに、菊の花を見てよめる　　貫之

秋の菊にほふかぎりはかざしてむ花よりさきと知らぬわが身を

（古今　秋下　二七六）

2　世のはかなき事をいひてよみ侍ける　　したがふ

草枕人はたれとかいひをきしつゐのすみかはの山とぞ見る

（拾遺　哀傷　一三二六）

貫之集や順集に見えず、事情の詳細はわからないが、順の歌は身近な死の体験を契機として発想されたものであろうか、両者共詞書の語句には強い無常感がにじみ出ている。

3　僧都消息「立ちぬる月の、廿日のほどになむ、つひに空しく見給へなして、世間の道理なれど、かなしび思ひ給へる」などあるを見給ふに、世の中のはかなさもあはれに……

（源氏　若紫　大系一P213）

4　源「世の中の、いとはかなきを見るまゝに、行くすゑ短う、物心ぼそうて、行ひがちになりにて侍れば……

（源氏　柏木　四P20）

5…など「世の中なべてはかなく、いとひ捨てまほしきこと」をきこえかはし給へど……

（源氏　鈴虫　四P90）

6 冷泉「次の君とならせ給ふべき御子おはしまさず、物のはえなきに、世の中はかなくおぼゆるを、心やすく、思ふ人々にも対面し、わたくしざまに心をやりて、のどかに過ぎまほしくなむ」

（源氏　若菜下　三P326）

7 北方「…この君の御事をのみなむ、儚き世の中を見るにも、後めたくいみじきを…」

（源氏　東屋　五P135）

8 明石中宮「…大将も、さやうには言はで、世の中のはかなく、いみじき事、かく、宇治の族の、命みじかゝりける事をこそ、「いみじう悲し」と思ひて、の給ひしか」

（源氏　蜻蛉　五P322）

3は紫の君の祖母の死の報に接した源氏の心情であり、4は、女三の宮が柏木との子を出産した後、悩み苦しむ源氏の女三の宮に向かってのことばであり、5は亡き母六条御息所の業火に苦しむ姿を思い、出家の希望を申し出た秋好中宮と源氏との対話の場面であり7は浮舟の母北方が浮舟の行く末を案ずることばであり、8は浮舟入水の事情について語る大納言の君に対する明石中宮のことばに出て来る、中宮の把握していた薫君の心情である。いずれも、身近な人の死や何かのことに触れて感じざるをえなかったこの世の無常の認識を表わすものであった。世の中のはかなさを最も多く語る宇津保物語にあっても、事情は変らない。長くなるので解説は省略して用例だけを列挙すると、

9世の中のかくはかなければこそ、けしからぬわらはべのゆくさき思ひやられて、うしろめたう覚え侍れ。

（春日詣　正頼のことば　角川文庫　上P168）

10はかなかりける世の中に、つらしと思う給ひけむこと……

（あて宮　あて宮の心中思惟　中P86）

11世の中ははかなきものなり。かく参り給ひぬとも、限りと思はじ。

（同　仲忠の心中思惟。中P73）

12世の中のはかなくのみおぼゆるを、親王たちをしばしば見ぬなむ。

（蔵開上　帝から女御への文　中P242）

13白雪のふればはかなき世の中を独り明かさむ事のわびしさ

（蔵開中　東宮の歌　中P282）

14世の中はかなきに、今は思ふやうは、人の聞かまほしくし給ふ物の音を、手を惜しみて、今日も死なば、何のかひかは。

（蔵開下　仲忠のことば　中P325）

15世の中のはかなく侍りしかば、おこなひもし侍らむとて、しめやかなる所求めて、年ごろこもり侍るを……

（国譲中　実忠のことば　下P78）

16世の中ははかなき物ぞや。

（国譲下　右大弁季英のことば　下P201）

17院・内裏の御書などのことより、いたづらに歳月をすごし侍るに、世の中もいくばくはかなき物か。

（楼の上上　仲忠のことば　下P352）

18道のまま、世の中いとはかなくもあはれにて、紀の国に年経給ひしなど、よろづ思ひ続けられ給ふ。

（楼の上下　涼の心中　下P352）

宇津保の用法は源氏などにくらべると総じて観念的であり、しかしそうであるだけに、「世の中」即「はかなし」という思考がこの時代に定着していたことを物語っている。蜻蛉日記では、村上天皇崩御にあたって、道綱の母が貞観殿の御方登子に贈った、

19世の中をはかなきものとみささぎのうもるる山になげくらむや
ぞ　（上　全集P188）

という歌があり、これは和泉式部日記の冒頭部分の通常の解釈のように、「あなたと亡き帝との仲らいのはかなかったことを…」と解することもできそうだが、不思議とここをそのように解く注釈は目に入らない。「御方さまはこの世を無常なものとお観じになり……」（上村悦子氏　蜻蛉日記全訳注）のような解し方が一般的で、むろんそれが正しい。この日記にはもう一つ、道綱の母が昔兼家が源兼忠の女に産ませた少女を養女にしようとするくだりで、兼忠の女の異腹の兄が母娘の近況について語ることばの中に、次の例が存する。

20そもそも、かしこにまぼりてものせむ、世の中いとはかなければ、いまはかたちをもことになしてむとてなむ、ささのところにものせらるる。　（下　P313）

最後に大和物語の一例。（四一段　大系P250）

21これ四人つどひてよろづの物がたりし、世の中のはかなきこと世間のあはれなるいひ〳〵て、かのおとゞのよみ給ひける

いひつゝも世は儚きをかたみにはあはれといかで君にみえまし

以上のような用例の中で考えるとき、和泉式部日記の「ゆめより もはかなきよの中」のはかなき世の中とは、この世の無常を意味するものとして把えられねばならない。少くとも当時の読者はそう読んだであろう。そしてそれた和泉式部集の中にひんぱんに使われている用法とも一致する。

遠き所へゆく人に、「世のなかのはかなき事」といひて

それとみよ都のかたの山ぎはにむすぼほれたるけむりけむらば　（二一五）

人に「世のはかなきことを」などいひて

いかにせんいかにかすべき世の中をそむけばかなしすめばすみうし　（四三八）

世のはかなき事などいひて泣くに、ちかくふしたる人の袖のぬるるを、「あいなのわざや」といふに

大方のあはれを知るにおつれども涙はきみにかけてこそ思へ　（四五七）

世のはかなきころ、夢ばかり人にあひて

あるほどにとひみてしがなたえにしはいかばかりうきよとかありしと　（六九六）

世のいみじうはかなきころ

きこえしもきこえずみしもみえぬ世にあはれいつまであらんとすらん　（七一〇）

つくづくとほれてのみおぼゆれば

はかなしとまさしくみつる夢の世をおどろかで寝る我は人かは　（続九六三）

露より世のはかなき事もあるに

和泉式部日記と為尊親王

草のうへの露とたとへぬ時だにもこは頼まれじまぼろしの世か
（続一一四九）

世の中はかなき事などいひて、槿花（あさがほ）のあるをみて

はかなきは我が身なりけりあさがほのあしたの露もおきてみてまし
（続一二九六）

よの中はかなき事など、夜ひと夜いひあかして、かへりぬるつとめて

おきてゆく人は露にはあらねどもけさは名残の袖もかわかず
（続一三二五）

つねよりもよのなかはかなうみえしころ　九月九日

ききときく人はなくなる世の中に今日も我が身はすぎんとやする
（続一三七三）

「世」と「はかなし」の結びついたものもあわせて記したが、和泉式部がどのような識認で世の中のはかなさをいっているかは明らかであろう。和泉式部日記の書き出しと通じるところの多い続集九六三は帥宮挽歌群中の一首である。

和泉式部日記に登場して来るのは、この世の常無さ、よりどころの無さを痛切に思い、歎き歎きはかない日々を明かし暮らしている女性であった。しかも単に「はかなき世の中」ではなく、その頭に「ゆめよりも」を冠しており、それだけに、この世の無常を実感する心の切実であり深刻であったことがわかる。この世を夢にたとえることは古今集にすでに見え、時代が下るにつれて多くなって来るのだが、この世をその夢よりもいっそうはかないものだとする表現はこの例あたりが最も早いものであろう。大倉比呂志氏[10]は「『夢よりもはかなき世の中』は周知のように、式部と故為尊親王との仲を指してはいるが、それをも包含した式部の人生の縮図そのものを表象しているのではないかと思う」と述べておられるが、その前半はこれまでに述べたように問題であるけれども「ゆめよりもはかなきよの中」を式部の人生の縮図の表象とする見方は肯首すべきものであった。和泉式部日記は通説のように敦道親王薨去後の成立であろう。そこで遠藤嘉基氏[11]のように、冒頭の一句を、「それはもちろん為尊親王のことではあるけれども、同時にまた、敦道親王への追慕の涙にぬれた、式部の今の、日々の姿そのものの表現でもあったのではないか」という考えが出て来る。冒頭の一句が、為尊親王の死につき当たったことを契機にして得たこの世の無常の認識であり、彼女の人生の凝縮である以上、執筆時の作者のこの世への思いが二重映しになり、それだけ痛切度の加わることは、もはや必然だといってもよいであろう。

作者和泉式部のこれまでの生の軌跡をよく知っていたであろうこの日記の第一次の読者も、冒頭の数行から敦道親王を喪い、この世に絶望し、傷心の日々を送っている和泉式部の姿を読み取ったかもしれない。しかし、和泉式部は、冒頭の数行であくまでも為尊親王薨去後の、この世の無常にうちひしがれたおのが姿を描いていたのであった。前に述べたように、尾崎知光氏が説かれ、吉田幸一氏[12]も認められた後撰一七〇と拾遺七三三を「ゆめよりもはかなきよの中」の引歌ないしはその背景をなすものとして認めるならば――吉田氏は特に後者を重視され、私もそれに加担したい――そこから想起される「夏の夜の暁がたの別」「かげろふのほのかに見えしかげ」

ということばからは、ともかくも四年半ほど続いた敦道親王との恋よりも、もっともっと短かかった為尊親王との恋の方が連想されよう。そして「ゆめよりもはかなきよの中をなげきわびつゝあかしくら」している日々が、為尊親王を喪った後のものであることは、日記の次の文を読めばすぐに納得がいく。前掲の日記の文は次のように続いている。

ちかきすいがいのもとに人のけはひのすれば、たれにかとおもふほどに、さしいでたるをみれば、故宮にさぶらひしこどねりわらはなりけり。あはれにものゝおぼゆるほどにきたれば「などかいと久しうみえざりつる。とをざかるむかしの名残にはおもふを」などいはすれば、「そのことゝさぶらはではなれ〳〵しきやうにやとつゝましうさぶらふうちに、日ごろ山寺にまかりありきはべりてなむ。いとたよりなくつれ〴〵におぼえ侍しかば御かはりにも見たてまつらんとて帥の宮になんまいりて侍」とかたる。「いとよきことにこそあなれ、その宮はいとあてにけゝしうおはしますなるは。むかしのやうにはえしもあらじ」などいへば、「しかおはしませどいとけぢかくおはしまして、つねにまいるやとゝはせおはしまして、まいり侍と申候つれば、これもてまいりていかゞ見給ふとてたてまつらせよとのたまはせつる」とてたちばなの花をとりいでたれば、「むかしの人の」といはれて…

1 の、底本ナシ。拠両本。2 ゝ、底本ナシ。拠条本。3 か、底本ナシ、拠両本。4 みえ、底本こ。拠両本。5 う、底本く、拠両本。6 ち、底本へ、拠両本。7 つれ〴〵に、底本ナシ。拠両本。8 かは、底本ゆか、拠両本。9 しも、底本ナシ。拠両本。10 候つれ、底本せ、従条本（応本侍つれ）11 とのたまはせつる、底本ナシ。拠条本。12 の花、底本ナシ。拠両本。

このさほど長くない文の中に、和泉・故宮（帥の宮が出て来ることで弾正宮為尊親王とわかる）・帥宮・小舎人童の人間関係が実に適格に語られている。特に傍線を施した部分は四者の関係について雄弁である。もっとも小町谷照彦氏[13]のように、式部のことばの「いと久しうみえざりつる」と、小舎人童のことばの中に出て来る宮の童への「つねにまいるや」という問いかけとの間に矛盾を見て、「この、『久しく』と『つねに』という時間のずれは単に式部の主観的な時間意識の問題としてではなく、小舎人童の登場のしかたの矛盾として受け取るべきものと思われる」と説かれることもある。しかしこれを矛盾というべきであろうか。読まれるように小舎人童は久しく式部宅を訪うてはいないが、故宮の亡き後初めての訪問という感じではない。帥宮が新しく仕えることになった童に「いつも（よく）行くのか」と問い、小舎人童が「参ります」と答えてもそうおかしくはないのだが、「つねに」の語が応永本系統にないことも考慮しなければならない。応永本の単独異文はまま原型本の形を正確に伝えている可能性を有しており[14]、「つねに」は本来無かった語かもしれない。

それはともかく、ここに見られる為尊親王は、その従者であった童までが遠ざかる昔の名残りと思われるほど式部にとって慕わしい存在であり、帥宮から贈られた橘の花に、思わず「さつき待つ花橘の香をかげばむかしの人の袖の香ぞする」（古今　夏　一三九　よみ人しらず）の古歌が口をついて出る存在であった。そしてそうし

た二人の仲を帥宮はよく知っており、今の式部の思いをもある程度は察知していたことになろう。

では帰ります、「いかゞ聞えさせん」と童にいわれて式部は「ことばにきこえさせむもかたはらいたくて、なにかはあだ〳〵しくもきえたまはぬを[2]、はかなきことも」（1〳〵、底本ら。拠両本。2ぬを、底本さなるを。従条本。応本ぬに）と思い、

かほるかによそふるよりは郭公きかばやおなじこゑやしたるとという歌を贈る。訳者によって微妙なニュアンスの相違があり、尾崎氏の考注のような異説もあるが、普通には、

いただいた橘の薫る香で亡き兄宮様を偲ぶよすがにしますよりは、あなたのお声が聞きたいのです。兄宮様とそっくりなお声かどうかと。（全集）

というように訳される。式部の真意はそのとおりであろう。しかし第三句以下に表わされたもう一つの意味を読み落してはならない。花橘と同じようにほととぎすも昔をしのぶよすがとなるものであった。拾遺集哀傷の、

うみたてまつりたりけるみこのなくなりての又の年郭公をきゝて　伊勢

死出の山こえてきつらん郭公こひしき人のうへかたらなん（一三〇七）

からもわかるように、それは死者の世界とこの世とを結ぶ鳥であり、

いそのかみふるき都のほととぎす声ばかりこそ昔なりけれ（古今　夏　一四四　素性）

きかばやなそのかみやまのほとゝぎすありし昔のおなじこゑかと（後拾遺　夏　一八三　皇后宮美作）

のように昔と変わらぬ声で鳴く鳥であった。だから第三句以下は、「ほととぎすが、亡きあの方と聞いたあの頃の変わらぬ声で鳴いているか聞いてみたい――それによってあの方をお偲びしたい」という意であり、それは、「ただ橘の花を下さるより、お声を聞かせて下さるなり、お手紙を下さるなりしていただければ、いっそうあの方をお偲びすることができましょうに」という意味であり、むしろこれらの方が表の意味であった。たしかに帥宮への関心はあらわにうかがえるが、あくまでも主意は故宮への深い思いであり、多少大胆ではあるが形の上では儀礼の枠をそうはみ出さぬように仕立てられている。そして、帥宮への関心と為尊親王への思いという二重仕立ての歌を式部はこれからしばらく作り続けることになる。

しかし帥宮には、式部の心の動きは敏感に読み取れている。宮の返歌、

おなじ枝[1]になきつゝをりし時鳥こゑはかはらぬものとしらなん

1 枝　底本よ。拠両本。

には早くも式部への「兄と変らぬ」恋情が打ち出されており、おいかぶせるような翌日の

うちいでゝも有にしものを中〳〵にくるしきまでも歎くけふかな

1 い、底本ナシ。拠両本。

は恋情のあらわな告白となっている。

けふの間の心にかへておもひやれながめつゝのみすぐす月日を

式部のこの返歌の末句は三条西家本に「すぐす心を」とあるが、諸本の糸統論からすれば、[15]寛元本と応永本が一致する「すぐす月日を」が正しいことがわかる。「ながめつゝのみすぐ月日」が帥宮故のものでないことはあまりにもはっきりしている。それは帥宮には兄宮故のものとはっきりわかる表現であった。和泉式部は為尊親王への思いにかかわる日々を強調しているのである。もっとも「けふの間の」という限定つきではあっても帥宮の自分への思いを認め、その思いが、我が身の思いとは格段の差があるはずだと言いたいながらも、とにもかくにもそれと比較しうる次元のものとして把えていたり、我がながめつゝのみすごしている月日を「おもひやれ」と強く誘えたりしているところに、この歌が完全な拒絶の歌とはなっておらず、帥宮への関心や甘えを帯した一種の媚態の歌となっていることも確かであった。

日記に詳細は述べられてはいないが、帥宮からは「しばしば」御文があり、御返事も「時〳〵」しているという状態の中で、「つれ〳〵もすこしなぐさむ心地してあるほどに」と彼女は書いているが、そんなときに帥宮から、

かたらはゞなぐさむことも有やせんいふかひなくはおもはざらなむ

あはれなる御物語きこえん。[1]くれにはいかゞ。

1くれにはいかゞ、底本忍ひてくれには。拠両本。

という文があった。「しばしば」の御文とか「時〳〵」の御返事とかいう文はあるものの、それはおそらく回想記によくあるこの時期の総括的な印象の表現であり、この歌は直接その前の「けふの間の」の式部の歌を承けて詠まれたかに見える。ともかくこの歌では、式部の為尊親王への思いを尊重し、自分の兄宮に対する思いをも表に出す形をとっている。だれが「なぐさむ」のかについては、式部・帥宮・おたがいに、の三説があるが、男の歌としては「あなたのお心が」と読むのが素直であり、最近の注釈はほぼそれで一致している。ただ、語らうことによってあなたの心の「なぐさむことも有やせん」というためには帥宮が兄宮を深く思い、その死によって、世の中を「あはれ」に思っているという前程条件は必須であり、この歌はそれを自明のこととした上で成り立っているのである。歌に続く文の傍線部分は与謝野晶子氏の訳書に、

亡き人に就きての物語もなさばや、聞かばやと切に思はれ候。

と思い切った意訳のされているのが実際のニュアンスに近いであろう。為尊親王への二人の思いを中に立ててこそはじめて女に近づきうると男は判断しているのである。女の返事。

なぐさむときけばかたらまほしけれど身のうきことやいふかひぞなき

おひたるあしにてかひなくや。[2]

1や、条本そ、応本よ。2か、底本ナシ。拠両本。

「おひたるあしにて」は「何事も言はれざりけり身のうきは生ひたる芦のねのみなかれて」（古今六帖　三）の古歌によっている。「音のみ泣かれて」と、ここでも式部は故宮への思いに泣き濡れている我が身の姿を強調しているのである。そして式部の歌の「なぐさむ」の主体は、もはや明確に「私とあなた」と読める。下句と歌に続く文の「おひたるあしにてかひなくや」がそのことを語ってい

る。しかしこの歌でも、拒絶の歌になっていない点に注意を向けねばならないだろう。「語り合っても、泣いているばかりの私ですもの。何の益にもなりませんわ」というのでは、それでも……と、相手が押して来る余地を残してしまう。そしてそれを見すかしたように、帥宮は、かって為尊親王の夜歩きに供奉し、今は我がもとにあって、和泉への文の取り次ぎ役もやっている右近尉を供に、ある夜和泉を訪うたのである。

紙幅の都合もあってこの夜の二人の心の動きを詳細に追うことを今は避けよう。ただ、とりあえず指摘しておかねばならないのは、共寝を迫る帥宮の、

はかもなき夢をだにみであかしてばなにをか夏のよがたりにせむ

に対して答えた式部の、

よとゝもにぬるとは袖を思ふ身ものどかに夢をみるよひぞなき

にはまだ為尊親王を喪った悲しみが表面に出されていることである。「ヨと共にヌルというと、夜と共に寝るではなく、夜と共に濡る――ああ私の袖のことねと思う身ですもの…」と眠れぬ夜夜を強調しているのだが、この歌を最後に、つまり二人が結ばれるのをきっかけに、もはや式部の歌に為尊親王への思いが影を落すことはなくなるのである。

さすがに、帥宮の後朝の歌に対しての、

よのつねのことゝも更におもほえずはじめて物をおもふ身なれば

という返歌にすぐ続けて、式部は、

と聞えても猶、あやしかりける身かなとはいかなりけることぞと、あはれに、こ宮のさばかりの給ひしものをと、かなしう思ひみだるゝほどに…

と書き、少し後で帥宮の心中思惟に触れて、

…とみやのはてまでいたくそしられさせ給ひしも是によりてぞかしなどおぼしつゝむもいとねんごろにおぼされぬなるべし。[1]

[2]

1 そしらさせ、底本ましこられ。従条本。応本コノ前後異文。2 つゝむ、底本めしつらむ。拠両本。

と記している。そして以後は歌以外の文でも五月になって、侍従の乳母が宮を諫める詞に

すべてよくもあらぬことは此右近のぜうなにがしがはじむるなり。こ宮もこれこそはゐてありきたてまつりしか。

とある以外、為尊親王の影は日記から一切消えてしまうのである。

三

和泉式部日記で読む限りにおいては、和泉式部と帥宮との恋の初期に亡き為尊親王の果たした彼割はきわめて大きい。日記の流れに即して和泉と帥宮のその時その時の心の動きをその細かいひだにまで分け入って分析している鈴木一雄氏の全講和泉式部日記の〔鑑賞〕の条に「ふたりの出会いのためには故宮の存在は大きい。帥の宮にとっても、女にとっても、故宮を表に立てて近づくことが自然であったのである」とあるのはまさに正しい指摘であった。もっと

も藤岡忠美氏は日本古典文学全集の和泉式部日記の頭注に於て、冒頭の文について、「…亡き為尊親王への追慕に重ね合わせるかたちで敦道親王との新しい関係が導かれてくるところは物語的虚構がうかがわれる」とされる。藤岡氏は、前稿でも指摘したように、はやく昭和二五年河出書房刊の日本文学講座第二巻所載の「和泉式部」という作家研究の中でも「かほるかに」と「おなじ枝に」の贈答について「これはもちろんこの日記のもつ虚構であろう」と述べておられる。しかし、ここにはたして虚構が読み取れるであろうか。

「かほるかに」の贈答歌は、和泉式部正集の二二七・二二八に、

帥の宮、たちばなの枝を給はりたりし

かをる香をよそふるよりは郭公きかばやおなじこゑやしたると

返し

おなじ枝に鳴きつつをりし郭公こゑはかはらぬ物としらなむ

として出ている。和泉式部正集には和泉式部日記と重出する歌が六十余首、三群に分かれて存在している。第二群第三群の重出歌については、私は日記から和泉の歌のみが抄出されたものと考えているが、[16] 両者の関係にはさまざまな説がある。しかし「かをる香を」の贈答歌を含む第一群の重出歌については、それを日記からの抄出と見る説はない。「かほるかに」の方は千載集にも採られていて（雑歌上九六八）、和泉式部日記を第三者の手になる創作と見る立場からもこの贈答歌は和泉と帥宮との間に実際に交わされたものとして読まれて来た。和泉式部日記の歌の中では資料面から見て最も信頼度の高いものの一つであった。

和泉式部と為尊親王との間に恋愛関係があったとすれば、式部と亡き親王の弟帥宮敦道親王との交情のきっかけに兄宮の存在がかかわっているのはきわめて自然であろう。為尊親王の存在を意識することなしに二人の愛が始まり、進展して行ったなどと想像することは人の情からしても出来るものではない。したがって、「かほるかに」の贈答や故宮を仲立ちとして帥宮の登場して来る日記冒頭部分に虚構を認めようとするためには、和泉式部と為尊親王との恋愛自体を全く否定しなければならなくなる。そしてこの二人の間に恋愛関係がなかったとすれば、「かほるかに」の贈答歌だけではなく、故為尊親王への思いと、和泉なり帥宮なりへの思いとが微妙に交錯して表現されていることを確認して来た「けふの間の」「かたらはゞ」「なぐさむと」「よとゝもに」などの歌も実際には存在しえなかった歌だということにならざるをえない。そして、これらの歌を主軸として展開する二人の恋の描写――二人が結ばれるに至る経緯もすべて虚構だということになってしまう。日記と直接にはかかわりない正集二二七・二二八にも日記同様の虚構の手が加わっていることになる。

日記文学が日記とは別のものであり、単なる事実の記録として扱えないものであることは、最近では常識に近くなっていよう。したがって、日記文学と虚構というテーマが今日の日記文学研究の大きな課題になっている。おそらく虚構のない日記文学などごくわずかであろう。そして日記文学の作者の構築した虚構はいずれも執筆時の作者にとってそう描かねばどうにもならない、のっぴきならないもの、必然性の強いものであった。[17] ところが和泉の場合、実際には

為尊親王との恋などなかったり、帥宮との恋が為尊親王への思いを仲立ちとするものではなかったりしたとして、その場合どうして、帥宮との恋の実際の発端を書かず、そこに為尊親王の影を登場させて事実と異る恋の経緯を仕立てあげねばならなかったのか、その必然性が考えられそうにないのである。もちろん部分的な虚構は現日記に存するに相違ない。しかし、和泉式部と為尊親王との間に恋愛関係があり、その影を仲立ちとして二人が接近して行ったという大筋は認めざるをえないのである。

ただ、和泉の為尊親王への思いの深さには、日記を読んでみても、藤岡氏説と多少近くなるが、若干疑問は出て来る。「ゆめよりもはかなきよの中を……」の起筆部分で和泉が歎いているのは、短かくはかなく終わってしまった為尊親王との仲への思いではなく、主にその死によって痛感させられたこの世の無常であった。それは為尊親王への思いの直接的表白とは微妙に異るものであろう。そして帥宮への後朝の歌への返歌をした後での「こ宮のさばかりの給ひしものをと、かなしう思ひみだるゝ」という感慨を除けば、和泉の為尊親王への思いの表白はすべて、小舎人童へのことばとか、帥宮への歌とか、要するに為尊親王側の人々への語りかけの中でのみ行われていることは注目すべきであろう。感情の発露もしやすいし、それだけに誇張や挨拶も交じる可能性の多い部分である。「こ宮の……」という感情の動揺も、自己の故宮への思いと新しく始まった帥宮への愛との相克として描かれてはいず、故宮の愛を裏切ってしまったことへの自責という形でしか記されていないことも興味深い。二人の愛が確立された後為尊親王を意識することがないことも、それはかかわりを有する問題であろう。そして、「こみやのはてまでいたくそしられさせ給ひしも是によりてぞかしなどおぼしつゝむ」帥宮の思いに対する評語が、帥宮の苦悩の本質に迫ろうとするものではなく、「いとねんごろにおぼされぬなるべし」であることを思い合わせれば、その頃の和泉の為尊親王への思いがそれほど深刻なものではなかったと読むことができそうである。しかしこの時期の和泉の心象描写は、帥宮との恋を経た後の手によるものであるから、執筆時点の和泉の心象によって濾過されたものであり、当時の、ましてや恋愛期間中の為尊親王への思いの深浅はやはり不明とすべきであろう。

注1 (ア)和泉式部伝の修正―為尊親王をめぐって―（文学　昭51・11）
(イ)『和泉式部集』覚書―為尊親王歌を探る―（国語と国文学　昭52・6）その他。
2 清水文雄氏　和泉式部続集に収録されたいはゆる「帥宮挽歌群」について（国語と国文学　昭39・5）
3 和泉式部（日本詩人選）
4 ともかくもいはばなべてになりぬべし―和泉式部―（日本文学昭52・2）
5 注1の(イ)に同じ。
6 弾正宮為尊親王伝考（日本文学研究　一四　昭53・11）
7 森田　和泉式部日記論攷　第一章参照。
8 夢よりもはかなき世の中―日記文学冒頭の技巧―（国文学　昭34・2）
9 和泉式部日記形成論―その冒頭をめぐって―（源氏物語と女流日

記　研究と資料　所収）

10　「和泉式部日記」一私見―冒頭から主題への展開―（平安文学研究　四七　昭46・11）

11　和泉式部日記（日本古典文学大系）解説

12　和泉式部研究　一

13　和泉式部日記の方法（国文学　昭44・5）

14　注7に同じ。

15　注7に同じ。

16　和泉式部日記論攷　第二章

17　土佐日記については女流日記文学とは別の次元の作品として論じねばならない。

補記

和泉式部日記には書き出しの部分のほかにもう一つ「はかなき世の中」という言い方が見られる。十月のある昼、女車の様で訪れた帥宮が和泉を再度宮邸に誘うことばで、

このきこえさせしさまにはやおぼしたて。かゝるありきのつねにうゐ〳〵しうおぼゆるに[1]、さりとてまいらぬ[2]はいとおぼつかなければ、はかなきよの中にくるし。

1に、底本を。拠両本。2ら、底本りこ。拠両本。

とある。この「はかなきよの中にくるし」という部分は、玉井幸助氏の新註で「いつまでもこんな仲で居ては苦しい」と訳されて以来、戦後の諸注釈ではすべて、たよりない二人の仲に苦しんでいるといった解釈になっている。しかし、それまでは、

。世の中は苦しい事ばかりだね。併し如何にかして、お互に苦労の少いやうにしようぢやないか。　（全訳王朝文学叢書）

。ねえ厭だねえ、世の中は。どうにかして苦労をせめて少くしようぢやないかねえ、お互ひに。　（与謝野晶子氏　現代語訳　平安朝女流日記）

。仮初の此世に、苦しい思ひで生きて居る事だよ。　（竹野長次氏　新釈）

。浮世の中は苦しいものです。　（宮田和一郎氏　講義）

。はかない此世に苦しい思ひをすることです。　（田中栄三郎氏　詳解）

。此の一寸（ちょつと）した事がなか〳〵心苦しいのだ。　（五十嵐力氏　昭和完訳）

という解釈であった。この世を仮初のもの、常無きものとして把握しながら、そこにあってなお何事も思うにまかせぬことの苦しさの表白としてここは解釈せねばなるまい。帥宮にとって、はかなく、頼みにならないのは二人の仲だけではないのである。竹野氏・宮田氏・田中氏のような解釈の方が宮の真意に近いであろう。